國學院大學學術情報リポジトリ

中古推量系助動詞の諸相：未定・既定の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 清, Miyake, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000551

中古推量系助動詞の諸相

—未定・既定の観点から—

三宅 清

1 はじめに

最初に、副題の未定、既定を定義しておく。

1 榻なども皆押し折られて、すずろなる車の筒にうち掛けたれば、またなう人悪く悔しう、何に来つらむと思ふにかひなし。(葵287・8)

1 は、六条御息所の心中である。葵の上との車争いに遭遇したため、なぜ自分(御息所)は、わざわざ賀茂祭の見物などに来たのだらうかと思っている。ラムに上接する事態「来つ」は、御息所にとって自分自身の行為であり、事実である。したがって、ラムの推量の焦点は疑問詞「何に」に向かう。このような事実を表す事態を、本稿では「既定の事態」と呼ぶ。

一方、ラムで他者の心中を押し量る例もある。

2 年頃従ひ来つる人の心にも俄にたがひて逃げ出でにしを、いかに思ふらむ(玉鬘729・10)

兵部の君が長年従ってきた夫を置いて逃げて来たところで、夫はどう思っているかという場面である。思っている兵部の君にとって、ラムに上接する「思ふ」は、今そこにはいない夫、すなわち他者の心中であり、想像である。そのような場合を「未定の事態」と呼ぶ。ラムの推量の焦点は、疑問詞「いかに」のみに向かうことはない。

このような現象について、此島正年(1973)に、次のような記述がみられる。わが背子はいづく行くらむという例を挙げ、

「いづく行くらむ」では、どこかを行っていることは事実であり、そのどこであるかを疑っている。

とあり、続けて

これら(「なに・など・いかに」等の疑問詞と応ずる「らむ」—三宅注)では表現の焦点はもはや明確に疑問詞にあって、それと「らむ」は呼応し、用言の表わす作用そのものは全く推量の範囲外にある。

としている。

また、北原保雄 (1993) では、

既定の事態をもとにするから、その事態を存立させている原因・理由や目的などの推量が可能になるのである。

と記述されている。

また、夙に「あゆひ抄⁽¹⁾」にも

句中・句末ともに里「デアラウ」と言ふ。その心、いづれも、見えたる物と・隠れたることわりとを合はせて詠めり。細かに言はば、人を見て心を知ると・木を見て花を思ふと・草を見て種を疑ふとの三あり。

との言及がある。「見えたる物」が既定の事態に当たり、「隠れたることわり」が原因・理由などに当たると思われる。

このような現象は、ラムに特有なものなのだろうか⁽²⁾。そこで、中古の推量系助動詞について、特に疑問詞を受ける場合について、未定、既定の観点から探っていく。疑問詞には、原因・理由、疑問などがあるが、本稿では特に分けない。資料は源氏物語⁽³⁾を用いる。また、本稿で扱う推量系助動詞は、ム、ラム、ケム、ベシ、メリ、終止ナリ、マシの7種とする。

2 ム、ラム、ケム

初めにラムを取り上げる。

既定の事態

① ラムに上接する事態が自分自身の行為である場合

3 などで乗り添ひて行かざりつらむ、生き返りたらむ時、いかなる心地せむ、
(夕顔129・8)

源氏が、どうして自分も一緒に乗って行かなかったのだろうか、夕顔が生き返った時、どんな気持がするだろう、という場面である。源氏の心中で、ラムに上接する「乗り添ひて行かざりつ」は源氏の行為であり、思っている光源氏にとっては自分自身の行為なので、既定の事態である。

4 見奉るもいとほしう、何にありのままに聞えつらむ、(夕霧1326・5)

小少将が、御息所が涙をこぼしているのを見て、どうしてありのままに申しあげたのだろうと思っている場面である。小少将の心中で、ラムに上接する「ありのままに聞えつ」は小少将の行為であり、思っている小少将にとっては、自分自身の行為なので、既定に事態である。①は24例みられる。

② ラムに上接する事態に指示詞「かく(かう)」が用いられている場合

ラムに上接する事態に、かく(かう)という指示詞が用いられている例がみられる⁽⁴⁾。

5 かく数ならぬ身を見も放たで、などかくしも思ふらむと、(帯木48・13)

5は、いわゆる雨夜の品定めで、話し手の左馬頭が、私のような人数にも入らぬ男をどうして女がこんなにも思ってくれるのだろうかという場面である。ラムに上接する「かくしも思ふ」の「思ふ」は、佐馬頭にとって、他者の心中だが、「かく」という指示詞によって、「思ふ」が話し手の立場から現実として捉えられていることが明確であり、既定の事態であるということが出来る。6も「かう」という指示詞が使われている。

6大臣北の方の、さばかり立ち並びて、頼もしげなる御中に、などかうすずるごとを思ひ言ふらむ、とあやしきにも、(竹河1485・3)

大君が、少将の手紙を見て、父母ともに健在で、前途に何も不安のない身の上で、どうしてこうもつまらないことを(少将が)思ったり言ったりするのかと不思議に思っている場面である。思っているのは大君で、ラムに上接している「すずるごとを思ひ言ふ」は、少将の行為である。思っている大君にとっては、他者の心中であるが、指示詞「かう」によって、思っている大君が手紙を見て思っているのは事実で、既定の事態として述べていることが分かる。②は25例みられる。

①②を兼ね備えた、すなわちラムに上接する事態が自分自身の行為であり、なおかつラムに上接する事態に指示詞「かく」が用いられている例は1例のみである

7我はいかなる罪を犯して、かく悲しき目を見るらむ。(明石442・13)

「かかる」を「かく」に準じて考えれば、8も①②を兼ね備えた例といえる。

8いかなる罪深き身に、かかる世にさすらふらむ、(玉鬘731・9)

③ 不明

9弁参りて、「いとあやしく、中の宮はいづくにかおはしますらむ」と言ふを、いと恥かしく、思ひかけぬ御心地に、いかなりけむ事にかと思ひ臥し給へり。(総角1610・6)

9は、後の文脈(地の文)から、ラムに上接する「おはします」は既定の事態といえそうである。しかしながら、このような、前後の文脈による考察は、①②に比して客観性を欠くので、本稿では、敢えて未定の事態か既定の事態か「不明」の例とする。不明は9例である。

未定の事態

10「さらば、その遺言ななりな。消息は通はし給ふや。尼君いかに思ひ給ふらむ。(若菜上1104・6)

10は源氏の心中である。ラムに上接する「思ひ給ふ」は、尼君の心中、すなわち思っている源氏にとっては他者の心中であり、尼君がどのように(いかに)思っているかどうかは不明で、未定の事態である。

ラムの未定の事態は133例、既定の事態は51例みられる。疑問詞を受けるラムは193例存するので、未定の事態の割合は68・9%、既定の事態は26・4%である⁽⁵⁾。

ケム

既定の事態

① ケムに上接する事態が自分自身の行為である場合

11 「などで、類あらじと、いみじう物を思ひ沈みけむ。憂き身からは、同じ嘆かしさにこそ」と宣へるも、おいらかにらうたげなり。(滯標497・3)
花散里の発話である。どうして(このような悲しみは)またとあるまいと、嘆き悲しんだのかという内容で、ケムに上接する「思ひ沈む」は、花散里の心中である。

12 なほこの御けはひ有様を聞き給ふ度ごとに、などで、昔の人の御心おきてを
もて違へて、思ひ隈なかりけむ、と悔ゆる心のみまさりて(宿木1719・13)
薫が、中の君の様子を聞くたびごとに、どうして大君の意向に背いて無思慮なことをしたのかと悔やんでいるという場面で、ケムに上接する「思ひ隈なし」は、思っている薫の行為である。

11、12ともに自分自身の心中や行為を自分が思っており、ケムに上接する事態は、既定の事態である。25例みられる。

② ケムに上接する事態に指示詞「かく(かう)」が用いられている場合

13 「いかでかうしも足らひ給ひけむ。なほさるべきにて、よろづの事人にすぐれ給へるなりけり」(賢木373・2)
(源氏は) どうしてこうまですべてが備わっていたのか。やはり前世の果報で、万事何もかも人よりすぐれていたのだ、と人々が言っている。「かう」から、人々が、源氏を目の前にして言っていることが分かる。ケムに上接する「足らひ給ふ」は既定の事態である。

14 院の帝は、雄々しくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはします、
と世人思ひためれ、をかしき筋に、なまめき故々しき方は、人にまさり給へるを、
などでかくおいらかにおほし立て給ひけむ、(若菜上1066・1)

院の帝(朱雀院)は、男らしくしっかりした御学問などの面では頼りなくいらっしゃる、と世間で思っているようだが、趣味の方面、優雅で奥ゆかしい方面では人よりすぐれていらっしゃるのに、女三宮をどうしてこうもおっとりとお育てになったのだらうという場面。「かく」で示されているように、世間では目の前に女三宮がいるかのように言っている。27例みられる。

① ②を兼ね備えた例は1例存する。

15 などでかくはひあひがたき紫を心に深く思ひそめけむ(真木柱960・5)
「この」を「かく」に準じて考えると、次のような例もある。

16 なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖に触れけむ(末摘花226・3)

15、16とも限られた文脈の歌の例である。

③ 不明

17 いづこより秋は行きけむ山里の紅葉の陰は過ぎ憂きものを(総角1639・6)

文脈から秋が過ぎ去ったということが分かる。それを受けて、「秋は行く」と言っているのも、既定の事態かもしれないが、ラムの場合と同じく、「不明」とする。16例みられる。

未定の事態

18類なかりし御気色こそつらきしも忘れ難う。いかに人見奉りけむ。(胡蝶 799・9)

またとなく(不機嫌な)ご様子でしたが、恨めしさゆえにかえって忘れにくくて。女房たちがどうお思い申したことでしょう。

源氏の手紙である。書き手の源氏からは、ケムに上接する「人見奉る」—女房たちの心中は未定の事態である。未定の事態を対象とする例は68例みられる。疑問詞を承けるケムは138例あり、未定の事態は68例(49・2%)、既定の事態は54例(39・1%)存する。

推量は、一般的に未定の事態を対象とすると考えられる。その中で、ラムの既定の事態を対象とする場合が26・4%、ケムの既定の事態を対象とする場合が39・1%みられるのは注目される。

ム

19いかなれば、かくおはしますならむ。御心地の例ならず思さるるにや)(葵 320・11)

女房たちの発話で、紫の上は、どうしてこういつまでも休んでいらっしゃるのか。お加減がよろしくないのかと言っている。ムに上接する「おはしますなり」は、「かく」によって、女房たちの目の前で行われていることが分かる。既定の事態といえる。

20などかく程もなくしなしつる身ならむと、かき昏し思ひ乱れて、(柏木 1228・7)

20は、柏木の心中で、どうしてこうも生きる瀬もなく世間を狭めてしまったのかと思っている。ムに上接する「程もなくしなしつる身なり」は、柏木自身の行為で、「かく」で、それが目の前で行われていること、すなわち既定の事態であることが分かる。

21など、かくのみ悩ましげなる御気色ならむ、(宿木1724・13)

匂宮が、中の君を見舞い、なぜ中の宮はこんなふうにはばかり気分わるそうにしているのか、と言っている場面である。「かく」で中の宮が匂宮の目の前にいることを表している。話している匂宮にとって、ムに上接する「悩ましげなる御気色なり」は既定の事態である。

疑問詞を受けるムは611例あり、既定の事態を上接する例は、源氏に14例(2・2%)みられる。『日本国語大辞典』(小学館)に「原因や事情などを推測する場合に用いる。」という記述がある。

ムは、次例のような未定の事態を対象とする場合がほとんどである。

22 何心もなく参りて、かかる事どものあるを、人はいかが見む、すずろにむつかしきわざかな、と思ひわぶれど、(蜻蛉1951・7)

(侍従は) 言われるままにお邸に参上して、このような頂戴物があるのを、ほかの女房たちがどう思うことか、思いもよらぬ面倒なことになった、と困惑しているけれど、という場面。

思っている侍従にとっては、ムに上接する「見る」は、女房の心中で、未定の事態である。

以上みてきたように、いわゆるム系の助動詞でも、既定、未定の観点からはムとラム、ケムとの間に線が引ける(既定の事態はム14例(2・2%)ラム51例(26・4%)ケム54例(39・1%))。その原因を考えると、テンスが関係しているのではないか。ラムは「あり」—今、そこに存在する、ケムは過去—既に存在している—なのに対して、ムは、テンスに縛られていないからではないか。ここで、テンスに縛られているというのは、その上接する事態が確たる存在(事実)として示されやすいということである。したがって、テンスに縛られているラム、ケムには既定の事態が多いと考えられる⁽⁶⁾。

3 ベシ

ベシは、例えば『日本国語大辞典』では「原因・理由を・・・」の記載はないが、次のような例は、疑問詞が原因・理由を表している。

23 身のことにては、げにいと堪へ難かるべきわざなりけり、あやしや、などかうしも思ふべき心いられど、と思ひ返し給へど、えしも叶わず。(夕霧1351・4)

23は、(夕霧が) なぜこうまで(落葉の宮)のことを苦しく思い焦がれなければならぬのかと、思い返している。夕霧が自分自身の心中を述べている場面で、「かう」という指示詞も使われている。

24 などかく疎ましきものにも思すべき。(帚木71・4)

源氏の発話で、(空蟬は) どうしてこうも私をいやな男とばかりお思いになるのか、という場面で、源氏が自分自身の心中を述べている。「かく」という指示詞もみられる。

ベシが疑問詞と共に起して、原因・理由を表している例、すなわち既定の事態を上接するのは、この2例に止まる。23はベシがラムになっている本がある⁽⁷⁾。

4 メリ、終止ナリ

次に疑問詞と共に起するメリ、終止ナリを挙例する。

メリ

25はかなう過ぎ行けば、御わざのいそぎなどせさせ給ふも、思しかげざりし事なれば、尽きせずいみじうなむ。なのめにかたほなるをだに、人の親はいかが思ふめる。ましてことわりなり。また類おはせぬをだに、さうざうしく思しつるに、袖の上の玉の砕けたりけむよりもあさましげなり。(葵306・4)

わけもなく日数が過ぎてゆくので、法事の用意などをさせるにつけても、思いもよらなかったことなので、どこまでもあきらめられず悲しいことではある。とりえのない、ふつつかな子であってさえ、人の親はどのように思うか。(この女君(葵の上)の場合)、なおさらのこと、(嘆きの深さは)無理からぬものである。

26「秋果てて霧の籬にむすほほれあるかなきかにうつる朝顔

似つかはしき御よそへにつけても、露けく」とのみあるは、何のをかしき節もなきを、いかなるにか、置きがたく御覽ずめり。(朝顔644・7)

これとって格別の趣向もないが、君(源氏)はどういう気持からか、(朝顔の手紙を)下にも置きにくくごらんになるようである。

終止ナリ

27その今姫君はようせずは、実の御子にもあらかし。さすがにいと気色ある所つき給へる人にて、もてない給ふならむ」と言ひ貶し給ふ。「さていかが定めらるなる。親王こそまつはしえ給はむ。もとより取り分きて御中よし、人からも景迹なる御あはひどもならむかし」(常夏839・11)

先刻の話の今度の姫君は、ひよっとしたら実の御子ではあるまいよ。そうはいいても、(あの大臣は)じつに一癖ある人だから、(ああした)扱いをしているのだろうと、悪口をついている。「ところで、その姫君の縁談はどうお決めになるのだろう。兵部卿宮が自分のものにするのだろうか・・・」という内容である。

疑問詞と共起するメリは、25、26の2例、終止ナリは27の1例のみである。また、3例とも未定の事態を対象とし⁽⁸⁾、既定の事態を対象とする例はない。なぜ疑問詞と共起するメリ、終止ナリの用例が少ないのだろうか。

メリ、終止ナリは「証拠性」の助動詞である。例えば、近藤泰弘(2000)では、メリ、終止ナリについて次のように述べられている。

モダリティとしての性格は、認識的なもののうちでも、特に、情報の入手方法(視覚による・聴覚による等)を示すいわゆる証拠的(evidential)な性格を最も強く持ったグループである。

メリ、終止ナリの証拠性とは次のようなものである。

28時々中垣の垣間見し侍るに、げに若き女どもの透影見え侍り。褶だつもの、かことばかり引きかけて、かしづく人侍るなめり。(夕顔106・12)

28は「見て判断している場合」である。メリという判断は、その判断の証拠(根拠)である「見え侍り」という既定の事態に拠る。「見え侍り」を基にして「か

しづく人侍るなめり」と判断している。

終止ナリの例を挙げる。

29このかう申す者は、瀧口なりければ、弓弦いときづきしく打ち鳴らして、
「火危し」と言ふ言ふ、預が曹司の方に往ぬなり。(夕顔124・1)

瀧口の武士が弓弦を打ち鳴らす音や「火危し」と言う声を聞いて、終止ナリに上接する「往ぬ」(瀧口の武士が留守役の部屋の方に行くこと)を判断している。「往ぬ」は未定の事態だが、その証拠である瀧口の武士が弓弦を打ち鳴らす音や「火危し」と言う声は既定の事態である。28は「見え侍り」だから「かしづく人侍るなめり」、29は「弓弦いときづきしく打ち鳴らして」「火危し」と言ふ言ふ」だから「往ぬなり」なのである。すなわち、メリ、終止ナリという判断の証拠、換言すれば、原因・理由が既に示されている。したがって、特に原因・理由を表す疑問詞は不要なのである。

付言すると、前掲の25、26、27ともメリ、終止ナリと判断する証拠を欠く例である。また、諸本間の異同をみると、25は、河内本系に「べかめる」という本がある。26は、「いかなるにかあらん」となっている本が多い。また、27は「さためらるなどの給て」という本もある⁽⁹⁾。

5 マシ

30げに、かうおはせざらましかば、いかに心細からまし。(若紫184・1)

こうして源氏がおいでくださらなかったら、どんなにか心細かったでしょうと女房たちがささやきあっている。

この場面、実際は源氏は来訪し、女房たちも心細い思いをせずにいる。すなわち、「ましかば～まし」の条件句「かうおはせず」は、既定の事態と反対の事態(既定の事態)である。また、帰結句の「心細し」も、既定の事態と反対の事態(既定の事態)である。いわゆる「反実仮想」だが、本稿の既定、未定の観点からは、既定の事態の反対の事態の想定ということが出来る⁽¹⁰⁾。「心細し」が既定の事態にも拘わらず、疑問詞「いかに」に「まし」の推量の焦点が向かないのは、それが現実ではなく、想定(想像)されたものだからである。

31世にあらましかば、北の町に物する人の並には、などか見ざらまし。(玉鬘747・8)

夕顔が生きていたら、明石の君と同じくらいには扱わないわけにはいかなかった、という場面。

条件句の夕顔はこの時点では既に亡くなっており、したがって、帰結句の明石の君と同じくらいの処遇についての記述も事実とは異なる。つまり、既定の事態と反対の事態の想定である。「などか」が「まし」の推量の焦点化されないのも30と同様である。

32は「ましかば」ではない仮定条件—帰結句という例である。

32世に人めきてあらまほしき身ならば、かかる御事をも、何かはもて離れても思はまし。(総角1605・5)

大君が、世間並みに(結婚をして)過ごしたいという身ならば、このような事(薫との結婚)をどうして断る気になるか、という内容で、事実としては、大君は生涯独身と決めており、仮定条件句も帰結句も既定の事態と反対の事態の想定である。

次は、『日本国語大辞典』で、「(疑問の助詞や疑問語と呼応して)その実現の不確かさを嘆き、また実行を思い迷う意を表わす。」と記述されている用法である。

33京の事を、かく関隔たりては、いよいよおぼつかなく思ひ聞え給ひて、いかにせまし、戯れにくくもあるかな、忍びてや迎へ奉りてまし、と思し弱る折々あれど、(明石460・13)

源氏が、京の女君(紫の上)のことがますます気がかりになられて、「どうしよう、冗談ではすまされないな。こっそりと呼び迎えてしまおうか」と、決意が弱る時々もあるが、という内容。マシに上接する「す」は、未定の事態である。

34おぼつかな誰に間はましいかにして始も果も知らぬ我が身ぞ(匂宮1433・11)

気がかりなことだ。誰に問い尋ねたらよいのか。どのようにしてこの世に生れ、この先どうなっていくのとも分らないこの身であることよ、という薫の歌である。マシに上接する「問ふ」は、未定の事態である。

このような未定の事態を対象とするのは、マシの出自をムに求めることとの関わりも考えられる。

マシカバ～マシは、前述のように、レトリカルな表現だが、同じくレトリックと考えられる「反語」についても触れておきたい。

35后、女御など、皆年頃経てねび給へるに、いとうつくしげにて、盛りに見所ある様を見奉り給ふは、などてかはおろかならむ、はなやかに時めき給ふ。(竹河1486・2)

后、女御などは、皆年取っているのに、(大君が)ほんとかわいらしく、若盛りでみごとな容姿を見ては、(冷泉院は)どうして並一通りの(喜び)であろうか、そんなはずはない、という内容である。ここは地の文なので、作者は冷泉院が「並一通りの(喜び)ではない—おろかならず」という既定の事態を基にして、それを強めるために、「などてかは～ム」を使って一旦未定の事態として想定し、それを否定することにより、既定の事態をより強めている。マシの、前述のような、既定の事態と反対の事態を想定するという構図とは異なる。

36網代のけはひ近く、耳かしかましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかがはせむ。(橋姫1513・10)

網代のあるらしいあたりに近く、(水音も)耳騒がしい川のほとりなので、静

かに（行い暮す）という思いがかなわない面もあるけれど、しかたのないことである、という内容で、35と同じく地の文である。作者が「(何とも)せず(どうすることもできない)」という既定の事態を基に、「いかがは〜ム」により未定の事態として想定し、それを否定している。

6 おわりに

源氏物語を資料として、推量系の助動詞について、未定・既定の観点から概観した。その結果、

- 既定の事態を対象とする例が多い・・・ラム、ケム
- 既定の事態を対象とする例が少数ながらみられる・・・ム・ベシ
- 既定の事態を対象とする例がまったくみられない・・・メリ、終止ナリ、マジと、三分類できることが分かった。

この結果は、高山善行（2002）などの階層的モダリティの分類とは、特にムとラム、ケムとの扱いが異なる。むしろ、例えば、塚原鉄雄（1957）の分類に、結果的には近い。そこでは、ムは「まだ事実として実現していない事柄について用いる」＜非事実＞としているのに対し、ラム、ケムは「事実について推量する」＜事実＞として扱っている。また、井島正博（2010）では推量の助動詞は、「現実世界の事態を推量する「現実推量」と、現実世界とは切り離された仮想世界で何らかの事態を思い描く「非現実推量」の二種類に分けられる」との指摘がある。

今後は、本稿で得られた結果を、他の資料でも調査していきたい。また、本稿では取り上げなかったジ、マジは、なぜ用例数が少ないのかについても今後の課題としたい⁽¹¹⁾。

注

- (1) 「あゆひ抄新注」（風間書房）pp.288-289
- (2) ラムについては、特に「ツラム」という形式について、三宅 清（1998）で考察を加えている。
- (3) 本文は、「源氏物語大成」（中央公論社）校異篇に拠る。用例後の（ ）内の記述は、巻名頁数・行数を表す。
- (4) 指示詞については多くの研究の蓄積があるが、それらを整理した岡崎友子（2010）の直示用法「今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象があるもの」の規定が示唆的である。
- (5) 前述のように、「不明」の例も含めたため、足しても100%にはならない。
- (6) ラムとケムとの既定の事態の割合の差が有意的なものなのかは、今後の課題としたい。
- (7) 青表紙本系の三條西家本、別本系の麥生本、阿里莫本。
- (8) 上代の終止ナリ、例えば万葉集では、既定の事態を対象とする（三宅 清2003）。
- (9) 25は、メルがベカメルに（河内本系—七毫源氏、高松宮家本、尾州家本、大島本）、26は「いかなるにか」が「いかなるにかあらむ」に（河内本、別本系—保坂本、平瀬本）、27は「さ

ためらるなど」に(河内本系—御物本)になっている。25はメリが「思ふ」に下接しているが、筆者は、ベカメリが「思ふ」などの心中思惟を表す語に多く接続することを指摘した(三宅 清1993)。

- (10) 三宅 清(2001)では「既定の反対の事態に関わる想定」とした。
 (11) 疑問詞を受けるジは3例、マジは9例みられる。両語が少ないのは、各々ムの否定、ベシの否定という意味が、疑問詞を受けると、煩雑になるから、あるいは、それらの意味は、各々ム、ベシの反語として表せるからとも考えられる。

参考文献

- 井島正博(2010)「上代・中古語推量助動詞の疑問用法」『東京女子大学日本文学』106号
 岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房
 北原保雄(1993)「「らむ」留めの歌における既定と推量—原因などを推量する意味はどこから生じるか—」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
 此島正年(1973)『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社
 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
 高山善行(2002)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
 塚原鉄雄(1957)「推量の助動詞—その国語史的考察—」『国語国文』26巻7号
 三宅 清(1993)「連語「べかめり」について—源氏物語を資料として—」『岡山大学国語研究』第7号
 ———(1998)「助動詞「らむ」の意味用法—未定と既定—」『野州国文学』第62号
 ———(2001)「助動詞「まし」の意味用法—既定の事態に関わる想定—」『国学院雑誌』第102巻第8号
 ———(2003)「終止形に接続する「なり」の意味用法—上代と中古との相違について—」『国士館大学人文学会紀要第36号』